

のぞみ通信



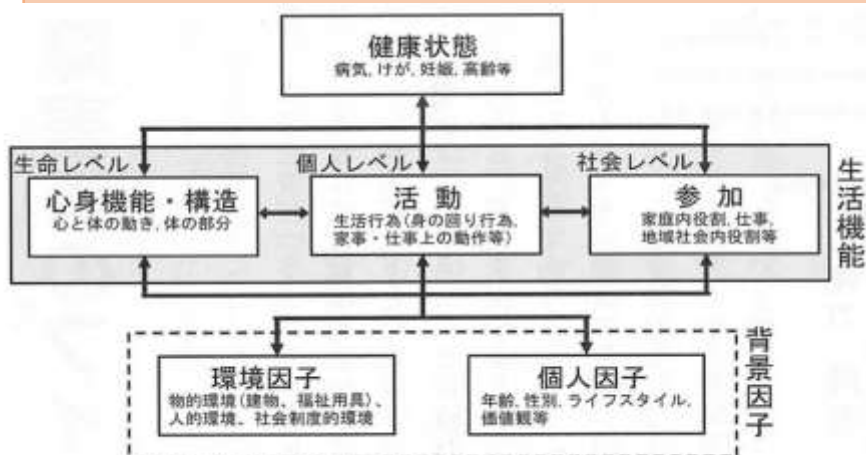
生協のぞみ訪問看護ステーション発18.2.26(月) No29

こんにちは
生協のぞみ訪問看護ステーションです

ICFを用いた事例検討で気づいたこと

ICFとは「“生きることの全体像”を示す“共通言語”」

「International Classification of Functioning, Disability and Health」の略称で、日本語では「国際生活機能分類」といいます。環境因子や個人因子等の背景因子の視点を加えて、障害があっても「こうすれば出来る」というように生活すること・生きることの全体像を捉え、プラスの視点を持つように広い視点から総合的に理解することを目指しています。



失ったものを数えるな
残されたものを最大限
に生かせ

<ルートヴィヒ・グットマン>

★マイナスの見方ではなく、プラスの面を見出せる！

- ・その人の評価が「プラスなのか」「マイナスなのか」、考え方によって変わることに気づけた。起きている現象が何から来るのか考える時、単に「危険認識が乏しい人」とレッテルを貼るのではなく、「アドバイスしてもあまり聞いてもらえない」というように「健康状態」「心身機能」「個人因子」等関連して考えられるようになった。
- ・機能全般なことだけでなく、「生活」を見るために必要な視点を持たた気がする。
- ・つついその方のマイナス面が目につき、「何とかしなくては!」「これでいいのだろうか?」とつまづく事がある。そういうときに、プラス面から入れるICFはとても有効だと思いました。視点が変わりとても参考になりました。

★看護とセラピストで共通理解ができる

- ・共通のものの見方や捉え方ができ、枠組みにそって情報を出し合い全体像が確認できた。
- ・多職種のかかわりが重要と感じた。
- ・生活機能で分類することで、その方の生活の状況が捉えやすく、全体が見えやすと感じた。生活を支えるリハビリ目線が細かくて参考になった。

★ケアの方向に迷った時、方向性を導くツールとしてもっと活用したい